

図書紹介

『チャップリンと

ヒトラー』

くメディアとイメージの

世界大戦

岩波書店 2015年

2200円 B6判 300頁

大野裕之 著

著者は、チャップリン研究の第一人者で、英国立フィルム所蔵のチャップリン映画「独裁者」NGフィルム400巻全てを見た2人のひとりです。京都大の卒論と修士論文をチャップリン研究にあて、いまのメディア状況を読み解く先駆的の書と言えます。

1889年4月、チャップリンとヒトラーは同じ週に生まれ、あのチヨビ髭も同じ頃付け始めます。39年9月、ナチス・ドイツがポー

ランドに攻め入り第2次世界大戦が始まるや、「独裁者」は準備され、母国イギリスの政府まで妨害するなかで40年に制作されます。

喜劇なのにラスト6分間はチャップリンの演説です。百万ドルも損すると周囲は反対でしたが、5百万ドル損してもやると、チャップリンは平和と民主主義を真面目に訴えます。高校生のような演説と批評されましたが。

以下に少し引いてみます。

「人は自由に美しく生きていくはずだ。なのに、私たちは道に迷ってしまった。食欲が人の魂を毒し、憎しみで世界にバリケードを築き、軍隊の歩調で私たちを悲しみと殺戮へと追い立てた。(略)知識は増えたが、人は懐疑的になり、巧妙な知恵は人を非情で冷酷にした」(大野訳)。

このシーン以前に、出鱈目なドイツ語演説があり、ヒトラーの演

説をパロディにしました。ヒトラーは、独特の演説で大衆を扇動し、それを映画にして、選挙で政権を得ました。一日に3回も演説したのが、「独裁者」が公開された1940年以降になると、年に7回まで減つたと論証します。映画の所為だけではないが、ヒトラーの演説が笑われるような契機を「独裁者」が提供したのは間違いないようです。

戦争の扇動者とたたかう武器は「笑い」です。チャップリンは自身を「平和の扇動者」として、ユーモアをもってナチスと戦いました。この書は、両者の闘いを綿密に描き出して、現代史を深めます。トランプ米大統領のSNS利用が、世界を動かす時代、メディアとイメージの世界大戦は現実です。ご一読をお勧めします。

(所員・吉田武雄)